

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鄭 惠仲

清末における山西票号の投資活動に関する研究

本稿は、20世紀前後における山西商人の投資活動に関する研究であり、なかでも山西票号という金融機関による全国規模の送金ネットワークを追跡するために、膨大な経営帳簿の整理・分析に本格的に取り組んだ力作である。山西商人は、明代には華北地方を中心に活躍し、清代には皇商として呼ばれるほど清政府と深い関わりをもつようになった。また清末には山西商人の活動は、山西票号として、商品流通のネットワーク、官金の為替送金のネットワークを形成して、近代中国の経済社会の中で重要な役割を果たしてきたことを明らかにした。そして、このような金融仲介機関の役割から、その後の中国における銀行成立の特徴を展望する。具体的事例として、票号業務を創業した日昇昌票号の帳簿を分析し、日昇昌票号はもと山西省平遙県の西裕成顔料店であるが、重慶からの顔料材料である銅録購入のために、多くの現金を漢口経由で運んだことを明らかにし、商人・地域市場・金融業相互間の関係を明らかにした。今後の課題として、帳簿分析を通じた経営分析が、地域間決済関係を論ずるのに十分であるか、また、他の票号との取引関係のなかの地域別の分業や相互依存関係はどのようなものか、などの点が存在する。しかし、このテーマは、新たな資料の発掘の下に、稿を改めて検討すべきであり、本論文において明らかにされた山西票号の投資・経営に関する議論をいささかもそこなうものではないと考える。本委員会は、上記のような画期的な成果をあげていることに鑑み、本論文が博士（文学）の学位に十分に相当するものであると判断する。